

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	劉 幸
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>Hidden Dimensions of Franklin Bobbitt's Theory of Curriculum</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査          教 授   丸 山   恭 司</p> <p>審査委員      教 授   坂 越   正 樹</p> <p>審査委員      教 授   山 田   浩 之</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本研究（邦題「フランクリン・ボビットのカリキュラム理論における隠れた諸相に関する研究」）は、フランクリン・ボビットのカリキュラム理論を正當に理解するために、彼の業績を当時の文脈において再解釈するものである（なお、本論文は英語で執筆された）。</p> <p>20世紀前半に米国で活躍したボビットは1918年に出版した『カリキュラム』により最初のカリキュラム研究者として広く認められている。また、ボビットは同時代人であるデューイらの進歩主義に対抗する社会効率主義に与する教育学者として理解されている。さらに、ボビット自身が後の著書や論文においてデューイと似通った主張を展開していることから、ボビットはその立場を転向したと見なされている。しかしながら、ボビットの著書等を丁寧に読み直すとき、ボビットの業績にはこれらの紋切り型の理解では捉えきれない側面のあることがわかる。</p> <p>よって本研究では、ボビットの書き残した資料を、彼が応答した時代状況に置いて読みなおすとともに、ボビットをめぐる上記の定説がなぜ生じてしまったのかを解釈することによってそれらの不備を指摘し、ボビットのカリキュラム理論がどのように理解されうるのかを提示することが目指された。</p> <p>本論文は、六つの章から構成されている。</p> <p>まず、第1章では、これまであまり知られていないボビットの生涯と業績が紹介され、ボビットをめぐる先行研究が整理された。そして、定説の不備が指摘され、本研究の課題が明確にされた。</p> <p>第2章では、ボビットの著書・論文を時系列に従って読み通すことにより、その一貫性が示され、彼がカリキュラム理論の立場を変更したという定説が否定された。主に1918年に出版された『カリキュラム』と1926年のNSSE年鑑に発表された論文が比較された。先行研究は、『カリキュラム』を社会効率主義に与する著作として理解する一方、NSSE論文にデューイとの共通点を見出し、立場の転向を確認した。しかしながら、NSSE論文において重要概念とされている「子ども」と「経験」は、既に『カリキュラム』においても一貫して論じられており、立場としての変更は認められないことが指摘された。</p> <p>第3章では、なぜ先行研究が誤った解釈に至ったのか、時代状況から読み解かれた。</p>			

まず、1915 年前後に生じたスネッデンとデューイの職業教育をめぐる論争との関連でボビットのカリキュラム理論が読まれてしまったことが誤解の一つの大きな要因であったことが示された。そして、1970 年代の米国教育史研究者らが描いた構図の問題点が指摘された。彼らは、ボビットの弟子であるタイラーのカリキュラム編成原理を科学主義と見なし、これに対抗する学派としてデューイ並びにパトリックに連なる系譜を対置させた。この構図により、ボビットのカリキュラム理論が「こども中心」や「経験カリキュラム」という着想においてデューイと多くを共有しているにもかかわらず、そうした側面が隠されてしまったことが示された。

第 4 章では、新しい解釈として、ボビットをどのようなカリキュラム理論家と理解すべきかが論じられた。ボビットはシカゴ大学において教育行政学を担当する大学教員として採用され、教育行政学としてカリキュラム研究を行った。19 世紀末から 20 世紀にかけて、教育行政学に期待されたのが、教育行政に関わる個人的経験のみから構成される知見から、より科学的なアプローチによって得られた知見からなる学的体系であった。ボビットは科学的アプローチを行う教育行政学研究者として期待され、教育資源の配分という観点からカリキュラムを考えるべきとの構想に至るのであった。

第 5 章では、行政システムを基軸としたカリキュラム開発の孕む問題が指摘され、その起源をボビットに見出すことのできる事が論じられた。また、教育学の立場としてはデューイと大きく異なることのないボビットが、行政システムへの信頼という点でデューイとは決定的に異なることが示された。行政システムとしての科学的管理法がカリキュラム理論の基軸に据えられることにより、カリキュラムは日常的経験を基礎とする学校教員には扱いきれない高度なものとなる。また、タイラーが方向づけた、学力テストによって成果評価を行うその後の動向は、ボビットが敷いた路線に端を発するものであったと言える。ボビットのカリキュラム理論はそれまでの定説とは異なるかたちで、その後の米国の教育動向を決定づけており、大きな影響を残しているのである。

最後に、第 6 章において、以上の成果がまとめられ、残された課題が示された。

本研究は次の点において高く評価できる。すなわち、ボビットの著書等を当時の状況との関連において丁寧に読みなおすことにより、先行研究が定説化しているボビット理解の誤りを正すとともに、新しい解釈を提示したことである。

一方、本研究には次の限界があった。デューイとの類似点と相違点を明確にすることが本研究の分析枠組みの一つとなっており、一定の成果を上げることができている一方で、デューイとボビットそれぞれが使用する「子ども」や「経験」という概念が、表面的な類似を超えてどういった意味で類似し、また異なるのかの検証が必ずしも十分ではない点である。思想史研究としてさらなる考察が求められよう。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30 年 2 月 9 日